

令和 6 年 6 月 6 日現在

機関番号：12603

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2019～2023

課題番号：19K01016

研究課題名（和文）1920年代のモンゴル人の軍事・諜報活動と統一独立国家建設の研究

研究課題名（英文）Research on the political relationship between intelligence activities and nation-state-buildings of Mongols in the 1920s

研究代表者

青木 雅浩（Aoki, Masahiro）

東京外国語大学・大学院総合国際学研究院・准教授

研究者番号：70631422

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 1,500,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、1920年代前半にモンゴル人民政府、ソ連が東北アジアで展開した軍事・諜報活動から、モンゴル人の民族統合と独立を目指す運動とモンゴル・東北アジアの政治情勢の関係を解明することを目指した。モンゴル、ロシア、日本の公文書史料の分析を主たる研究手法とし、国際的な場での研究成果の発表を重視した。本研究により、1920年代前半において、モンゴル人民政府がモンゴル人国家建設活動を展開する一方、「反ソ、反モンゴル人民政府」のモンゴル人が東北アジアの反ソ的傾向と結びついて活動したことを解明した。そして、これらのモンゴル人、東北アジア諸勢力が交差する場としてモンゴル東部地域が機能したことを指摘した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究により、モンゴル人民政府とは別に、ソ連とモンゴル人民政府に依らない国家建設を目指すモンゴル人の活動があったことが解明された。これは、モンゴル人民政府による国家建設という単純な歴史的展開を前提とする従来のモンゴル近現代史研究の傾向に対して、国家建設の重層的な展開という新規の視点を与える学術的意義を持つ。また、1920年代の東北アジアの政治情勢をモンゴル東部地域という地域概念から検討する本研究の成果は、20世紀の東北アジア史研究に新たな地域的枠組みを提示するという学術的意義がある。これら学術的意義を通じて、東北アジアを理解しうる地域、民族の新たな枠組みを提示した点に本研究の社会的意義がある。

研究成果の概要（英文）：Our research has aimed to analyze the political relationship between political situations in Northeast Asia and nation-state-buildings of Mongols by focusing on intelligence activities of Mongols and USSR. In our research, we have employed the analysis of historical archives written in Mongolian, Russian and Japanese as the main method of the research and aimed to publish the result of our research at the international academic conference on Mongolian studies. The result of our research has shown that anti-USSR Mongols have connected with anti-USSR political trends in Northeast Asia and attempted to promote their own Mongolian nation-state-buildings. Our research has also pointed out the significance of the eastern Mongolian region as the area of political contacts between the Mongolian people's government, anti-USSR Mongolian and political factors in Northeast Asia.

研究分野：アジア史、モンゴル近現代史

キーワード：モンゴル史 諜報 軍事 モンゴル人民政府 ソ連

### 1. 研究開始当初の背景

外モンゴル(現在のモンゴル国の領域)のモンゴル人は、1911年以降、モンゴル人独立国家建設を目指し、1921年にソヴィエト・ロシア(1922年末以降はソ連)の援助を得てモンゴル人民政府を結成し、その政府を中心として1924年にモンゴル人民共和国を成立させた。このモンゴル人の活動は、外モンゴルのみに留まるものではなく、東北アジアの広い範囲のモンゴル人社会の統合と、統合されたモンゴル人全体の独立を意識したものであった。東北アジア全体に関わるモンゴル人のこの活動は、東北アジアに関係する列強諸国(日本、ソ連、中華民国等)の諸勢力にも関係するものになった。外モンゴルのモンゴル人が東北アジアのモンゴル人社会の統合と独立を模索したこの活動において重要な意義を持ったのが、モンゴル人民政府、モンゴル人民共和国、ソ連が東北アジアで展開した軍事・諜報活動であった。軍事・諜報活動を通じて、モンゴル人民政府、モンゴル人民共和国は各地のモンゴル人社会と接触を図っていたのである。だが、史料上の制約から、このようなモンゴル、ソ連の軍事・諜報活動とモンゴル人の統合と独立を目指す運動の関係を解明する研究は、従来行われてこなかった。

モンゴル人民政府、モンゴル人民共和国、ソ連がモンゴル高原、東北アジアに展開した軍事・諜報活動からどのような情報を獲得し、情報が示す状況に対してどのような対応を取っていたかを解明することは、1920年代前半のモンゴル人の統合と独立を目指す運動の実態と、その東北アジアの政治情勢との関係を、従来のモンゴル近現代史研究の傾向とは異なる形で解明することにつながるものである。

### 2. 研究の目的

本研究では、1920年代にモンゴル人民政府、モンゴル人民共和国、ソ連が東北アジアのモンゴル人社会に対して行っていた軍事・諜報活動の実態を解明することにより、以下の2つの目的を達成することを目指した。

(1)モンゴル人の有力者、政治家達は、東北アジアの広い範囲のモンゴル人社会をどう統合し、モンゴル人国家を形成しようとしていたのかを解明する。特に、モンゴル人民政府、モンゴル人民共和国の政治家だけでなく、ソ連が外モンゴルに本格的に関与するようになったモンゴル人民政府成立以降においてモンゴル人が展開した多様な国家形成活動を解明することを目指す。

(2)東北アジアにおける日本、ソ連、中国の諸勢力(満洲の張作霖等)の政治的関係と、モンゴル人の統合と独立を目指す運動の関係を解明する。

これら2つの目的を達成することによって、モンゴル人民政府、モンゴル人民共和国、ソ連の軍事・諜報活動の分析から見たモンゴル人の統合と独立を目指す運動の実態を明らかにし、このモンゴル人の運動が深く関わる1920年代の東北アジアの政治情勢の研究に、新たな視点を提示することを試みた。

### 3. 研究の方法

本研究では、モンゴル、ロシア、日本の公文書史料の調査、収集、分析と、研究成果の国際的な場での発表を基本的な研究手法と位置づけた。このため、具体的には、以下の研究方法を取った。

(1)未刊行公文書史料の調査、収集、分析：モンゴル、日本において、1920年代のモンゴル人の統合と独立を目指す運動と軍事・諜報活動の関わる未刊行の公文書史料を収集するために、公文書史料の調査、収集を実施した。本来、モンゴル国においては、本研究の所定の期間において、年1回、文書館調査を実施する予定であった。しかし、本研究の期間中にコロナの世界的感染拡大が発生した。これにより、モンゴル国に外国人が入境できなくなり、予定通りの調査を実施できなくなった。そこで、2019年度、2022年度、2023年度のみ、モンゴル国の政党・公共機関文書館において公文書史料の調査、収集を実施した。また、当初の本研究の計画においては、ロシア連邦のロシア国立社会政治史文書館においても、毎年1回、公文書史料の調査、収集を実施する予定であった。しかし、コロナの世界的感染拡大とウクライナ戦争の発生により、ロシア連邦においては、予定した調査を実施できなかった。これに代替して、下記(2)に記載する刊行史料集の精密な読解、分析を実施した。日本の公文書史料については、アジア歴史資料センターを利用したネット調査を実施し、公文書史料を収集した。

(2)刊行史料集の調査、分析：本研究の開始後、ロシア連邦において Науч. ред. В. В. Наумкин, отв. ред. К. В. Орлова, В. В. Грайворонский. *Монголия в документах из архивов ФСБ России (1922-*

1936 年). *Сборник документов*. Москва. 2019. が刊行された。本史料集は、1920 年代のモンゴルにおけるソ連の諜報活動に関する公文書史料が多数掲載されている。これら掲載史料の中には、外国人研究者がロシア連邦の文書館に赴いても、直接閲覧することが困難な史料が多数含まれていると考えられる。このため、本史料集は、今後、モンゴル近現代史研究の発展にとって最重要の史料集の 1 つになると思われる。本研究にとっても必須の史料集であったため、本史料集の読解・分析を積極的に進め、最新の研究成果を出せるよう努めた。

これら(1)(2)の公文書史料調査により、1920 年代前半において、モンゴル人民政府、ソ連が軍事・諜報活動を活用して東北アジアのモンゴル人社会に関して如何なる情報を獲得し、それを利用してモンゴル人の統合と独立の活動をどのように展開したか、またモンゴル人民政府、ソ連に依らないモンゴル人の国家形成活動とは如何なるものであったかを検討することができた。

(3)国際的な場における研究成果の公表：本研究の内容は、従来のモンゴル近現代史研究には見られない独自性の高いものである。モンゴル国をはじめとするモンゴル研究の国際的な場において、研究成果を公表することが望ましいと考えられた。このため、本研究の実施当初から、本研究の成果を国際的な場で公表することを目指した。この研究計画に従い、コロナの世界的感染拡大によって延期されていた国際モンゴル学会議の大会が開催されるまで、本研究の期間を延期することとなった。これにより、2022 年度にモンゴル国で開催された国際会議で研究成果の中間発表を実施した後、2023 年度に開催された国際モンゴル学会議第 12 回大会において、研究成果を発表することができた。

#### 4. 研究成果

本来の研究計画では、検討の対象とする時期を 1924 - 1928 年と設定する予定であった。しかし、コロナの世界的感染拡大による公文書史料調査の制限、獲得された公文書史料の性質と内容、提示された研究成果の重要性等に鑑み、むしろまず 1920 年代前半の状況を正確に把握し、その新たな歴史像を提示する必要に迫られた。このため、本研究では、1920 年代前半のモンゴル、ソ連の軍事・諜報活動とモンゴル人の統合と独立の運動の関係を追究することとした。

##### (1)主な成果

軍事・諜報活動から見たモンゴル人の国家建設過程と外モンゴルの政治情勢の実態解明

モンゴル人民政府が結成され、モンゴル人民共和国が成立する 1920 年代前半において、モンゴル人民政府、ソ連が実施した軍事・諜報活動から得られる情報は、当時の東北アジア情勢と結びつく形で発生した外モンゴルの政治的事件と、モンゴル人民政府と中華民国領内モンゴル人社会との関係構築の 2 つの問題の実態解明のために、重要な視点を提示するものである。

モンゴル人民政府結成後、モンゴル人国家建設を進めていく際、モンゴル人政治家が粛清されて政治情勢の混乱を惹起する政治的事件が外モンゴルにおいて頻発するようになった。当時の外モンゴルにおけるソヴィエト・ロシア、コミンテルンの活動を指導していたモンゴル駐在ソヴィエト・ロシア外務人民委員部全権代表代理 A.Ya. オフチンは、諜報活動から得た情報を元に、「反ソ、反モンゴル人民政府」の活動を行うモンゴル人、満洲のロシア反ボリシェヴィキ派や張作霖、日本との結びつきを前提として、このような政治的事件に対処していた。オフチンは、1911 年のモンゴル独立運動以来モンゴル人国家の元首と外モンゴルで見なされてきたボグド・ハーンをはじめとするモンゴル人王公、高位僧の勢力を「反ソ」的存在と見なし、外モンゴルの「反ソ」的諸勢力、国外のロシア反ボリシェヴィキ派、張作霖、日本と結託していたと考えていたのである。モンゴルで展開された軍事・諜報活動に主たる研究視点を置くことにより、ロシア革命後の内戦と干渉戦争以降続くシベリア、モンゴル高原、満洲の政治的混乱が、外モンゴルのモンゴル人社会における政治的事件と結びつき、モンゴル人の国家建設過程や政治情勢に大きく影響していた、というメカニズムを見出すことができる。

また、モンゴル人民政府は、成立後、外モンゴル以外のモンゴル人社会と関係を構築し、広い範囲のモンゴル人をモンゴル人国家に包含すべく多様な活動を試みていた。新疆北部及び内モンゴルのオランチャブ盟のモンゴル人社会に対して、モンゴル人民政府は軍事・諜報活動を通じて、現地の情報を収集し、現地有力者との関係を構築し、自政権の宣伝活動を行って、関係構築の活動を幅広く展開した。特に、オランチャブ盟には、モンゴル人民政府の国内政治保安と対外諜報を担当する内防局の元局長バルダンドルジが派遣され、オランチャブ盟のモンゴル人社会との関係構築を進める一方、その周辺地域のモンゴル人社会の情報(特に中華民国軍の駐屯に関する情報)を収集し、国外のモンゴル人社会との関係構築活動のさらなる拡大に努めていた。

モンゴル人による「反ソ、反モンゴル人民政府」活動の実態解明

軍事・諜報活動から得られる情報等により、上記の「反ソ」的傾向が単なるソ連側が持つイメージに留まるものではなく、実際に存在したようであることが確認できる。即ち、モンゴル人民政府結成後にソ連が本格的に外モンゴルに関与するようになると、その政治体制や外モンゴルに対する関与に強く反発し、ソ連とモンゴル人民政府に依らないモンゴル人国家建設を模索するモンゴル人が現れ、多様な活動を展開するようになった。彼らは、外モンゴルで反抗活動を展開すると共に、国外に協力者を求め、ロシア反ボリシェヴィキ派、張作霖、日本、中華民国北京

政府等との関係構築を積極的に模索したのである。これに対して、このようなモンゴル人を自分達の政治的目的のために活用しようとする外国勢力も登場した。特に、ロシア反ボリシェヴィキ派の重要人物であり、シベリア出兵時に日本軍と手を組んでザバイカル地域に政権を建設しようとした G.M.セミョーノフは、反ソ活動を継続するために、「反ソ」的モンゴル人と手を組み、日本、満洲等で広く活動を組織した。

これに伴い、モンゴル人民政府成立後に、ソ連の関与によって外モンゴルが赤化し、圧政が敷かれるようになった、という情報が東北アジアに広く流布した。このような情報は、1924 年に成立したモンゴル人民共和国が当初から社会主義国であったとする現在の日本におけるイメージにもつながる風評であるとも言えよう。これらの情報は、モンゴル人民政府の結成や外モンゴルに対するソ連の関与の開始といった外モンゴルの体制変化に不満を感じた幅広い人々が、国内外で流布したものであった。また、セミョーノフら反ボリシェヴィキ活動に従事する人々がこれらの情報を積極的に広めていたことも確認できる。外モンゴルの政権に不満を抱く者達が政権に反抗する内容の情報をモンゴル国外に拡散する、というメカニズムは、これ以後継続して見られるようになっていく。

「反ソ、反モンゴル人民政府」の情報に対するモンゴル人民政府の対応の解明

モンゴル人民政府がモンゴル人国家を建設していく過程で大きな障害になった問題の 1 つが、上記の「反ソ、反モンゴル人民政府」の情報の拡散であった。東北アジア各地のモンゴル人社会でこのような情報が拡散したことにより、モンゴル人民政府に対する信頼が揺らいでしまったのである。これに対して、オランチャブ盟との関係構築のケースや、中華民国における風評の拡散への対応において顕著であるように、モンゴル人民政府は、現地モンゴル人社会に使者を派遣し、これらの情報を誤った風評であるとして否定し、モンゴル人民政府の「実態」(自分達が拡散を望む政府のイメージ)を伝えることを通じて、モンゴル人社会との関係構築を図っていたのである。

このことは、外モンゴルにおいても同様であった。モンゴル人民政府は、結成後即座に外モンゴル全土を把握できたのではなく、外モンゴル各地で「反ソ、反モンゴル人民政府」の情報が拡散する状況において、外モンゴル各地の「反ソ、反モンゴル人民政府」の傾向と対立しながら、国家の統合を図っていたのである。

軍事・諜報活動に主眼を置くことにより、「反ソ、反モンゴル人民政府」の情報の拡散がモンゴル人の統合と独立を目指す運動に大きく影響したこのような実態を解明することができたのである。

モンゴル東部地域の政治的重要性の提示

モンゴル人民政府によるモンゴル人の統合と独立を目指す運動、外モンゴルへのソ連の政治的関与、ソ連とモンゴル人民政府に対するモンゴル人の反抗活動、ソ連に反抗してモンゴル人と結託しようとするロシア反ボリシェヴィキ派、これらに関与しようとする張作霖、日本等が政治的に交差する場として、モンゴル東部地域(外モンゴルのハルハ・セツェン・ハン部、内モンゴル東部、フルンポイル地域)が存在していたことが本研究によって明らかになった。「反ソ、反モンゴル人民政府」のモンゴル人が活動し、ロシア反ボリシェヴィキ派、張作霖、日本と結びつき、「反ソ、反モンゴル人民政府」の情報を拡散させていた中心的地域が、モンゴル東部地域であった。モンゴル人民政府、ソ連もこのことを認識し、モンゴル人国家の建設活動において、この地域への関与を特に重視するようになっていった。モンゴル近現代史研究においては、この地域が有するこのような特殊な政治的重要性を考慮する必要がある、ということが本研究で明らかになったのである。

## (2)得られた成果の国内外における位置づけとインパクト

従来の 1920 年代の外モンゴルの政治情勢に関する研究においては、モンゴル人民政府、モンゴル人民共和国の活動を研究の中心に置いて考察する手法が主流であると言える。この従来の研究手法に対して、本研究の成果は、モンゴル人民政府、ソ連に依らないモンゴル人の活動に主眼を置いた新たな研究手法の必要性を強く示唆するものである。即ち、モンゴル人民政府主導のモンゴル人国家建設の推進という従来のモンゴル近現代史研究の主流の視点に対して、1920 年代の外モンゴルにおいてはモンゴル人民政府と、多様な「反ソ、反モンゴル人民政府」のモンゴル人が、ソ連、ロシア反ボリシェヴィキ派、張作霖、日本、中華民国等と関係を構築しながら、それぞれのモンゴル人国家建設を目指す活動を広く展開していた、というモンゴル近現代史の新たな歴史像を提示したことが、本研究の新規なインパクトであると言える。

また、本研究の成果により、モンゴル人民政府、ソ連が東北アジアに展開した諜報活動をモンゴル人国家建設に活用し、「反ソ、反モンゴル人民政府」のモンゴル人も同様に東北アジアにネットワークを構築して独自のモンゴル人国家建設を目指していたことが明らかになった。これにより、1920 年代の東北アジアの政治情勢を形成する重要な政治的ファクターとして、多様な形でモンゴル人独立国家建設を模索するモンゴル人のネットワークがあることが、本研究によって示された。このようなモンゴル人ネットワークが持つ政治的重要性を指摘できたことも、当該時期の東北アジアの政治情勢の研究に対して本研究の成果が持つ新規なインパクトであろう。

そして、本研究の成果により、東北アジア・モンゴル近現代史研究に対してモンゴル東部地域が持つ政治的意義が指摘された。従来の研究において、この問題に対して殊更に焦点が当てられたことはほぼなかったと言える。このような現在の研究の傾向に対して、内外モンゴルの枠を超

えたモンゴル人ネットワークとその政治的動態を解明したことにより、東北アジア・モンゴル近現代史研究の新たな地域的枠組みを提示することができた。この点も、従来の研究に対して新たな形の研究を提案する本研究の新規なインパクトであると言える。

現在のモンゴル近現代史研究の世界、とりわけ研究の牽引役を果たしているモンゴル国とロシア連邦の研究界においては、モンゴル人民政府、モンゴル人民共和国のみによる国家建設過程の研究という単純な歴史像のみが重視され、本研究が示す歴史像はタブー視されている程である。本研究の成果に関わる研究については、モンゴル国の O.バトサイハン、ロシア連邦の S.L.クジミンが本格的な研究を開始したばかりであり、いくつかの成果があるだけに留まっている。本研究の成果は、モンゴル近現代史研究の世界において現れ始めている上記の新たな研究手法の先駆をなすものであると位置づけることが可能であろう。この点において、モンゴル近現代史研究に新規の研究視点をもたらしたというインパクトを本研究は有すると言える。

### (3) 予想外の新たな知見

本研究の開始後、コロナの世界的感染拡大とウクライナ戦争が発生した。これらの事態により、公文書史料の調査方法、それによる獲得史料の質と量、研究の実施過程等に関して、本研究も大きな変更を迫られた。その一方において、研究計画の変更に伴い、新たな知見を得ることもできた。特に 1920 年代の外モンゴルの政治情勢の研究における日本の公文書史料の重要性は、本研究の成果から得られた新たな知見であると考えてよからう。近現代外モンゴルの政治情勢に関する従来の研究においては、1990 年代の民主化に伴って公開されたモンゴル、ロシアの公文書史料が最も重要な研究対象と見なされてきた。当初の本研究計画においても、その発想を共有していた。だが、事態の変化によって本研究計画において日本における公文書史料調査を重点的に行うようになったところ、「反ソ、反モンゴル人民政府」のモンゴル人の活動や、モンゴル東部地域の政治的重要性に関わる重要な史料が数多く発見されたのである。このような 1920 年代のモンゴルに関する日本の公文書史料は、モンゴル人民政府、モンゴル人民共和国を中心に置く従来の外モンゴルの政治情勢、モンゴル人国家建設の過程の研究傾向に対して、新たな知見をもたらすものであると言える。

### (4) 今後の展望

本研究の成果が指摘する「モンゴル東部地域の政治的重要性」、「東北アジアにおける「反ソ、反モンゴル人民政府」のモンゴル人の活動とネットワーク」は、従来のモンゴル近現代史研究の傾向を大きく変更しうるものである。また、ソ連、ロシア反ポリシェヴィキ派、張作霖、日本等が関わって展開する東北アジアの政治情勢の形成過程にも、この 2 つの政治的ファクターは重要な影響をもたらすものである。これに鑑み、モンゴル東部地域を中心に展開した「反ソ、反モンゴル人民政府」の活動とそれに対するモンゴル人民政府、モンゴル人民共和国、ソ連の対応から、1920 年代の東北アジアの政治情勢の展開を再構成することが、今後研究される必要があると考えられる。これにより、満洲事変までの東北アジアの政治情勢とモンゴル人の関係性が、新たな形で解明できることが期待できるであろう。

### < 参考文献 >

- ・ M. Локи. А. Я. Охтины илтгэл дэх Богд хаан ба Д. Бодоогийн хэрэг явдал. Ответственные редакторы выпуска С. Л. Кузьмин, О. Батсайхан. *Институт Богдо-гэгэна в истории Монголии. К 150-летию Богдо-гэгэна Джебцзундамба-хутухты VIII – последнего великого хана монголов*. 2019. pp.310-329.
- ・ 青木雅浩、「ポドー事件とロシアの反ポリシェヴィキ派」、『北東アジア研究』別冊第 6 号、2021 年、pp.185-204.
- ・ 青木雅浩、「モンゴル人民政府と中華民国領内のモンゴル人の関係構築—バルダンドルジのオランチャブ盟派遣—」、『「帝国」の秩序と再編：モンゴルの文書と史跡の探求』、2022 年、pp.101-112.
- ・ 青木雅浩、「1920 年代前半の外モンゴルの国内情勢に関する情報と政治情勢」、『モンゴルと東北アジア研究』第 8 号、2023 年、pp.25-38.
- ・ О. Батсайхан, З. Лонжид, С. Баатар, *Хэлмэгдэл ба цагаатгал: Түүх ба баримт*, Улаанбаатар, 2021.
- ・ С. Л. Кузьмин. *Баргинский и харачинский вопросы в истории Восточной Азии (первая половина XX века)*. 1. Москва. 2021.
- ・ Науч. ред. В. В. Наумкин, отв. ред. К. В. Орлова, В. В. Грайворонский, *Монголия в документах из архивов ФСБ России (1922-1936 гг.)*. Сборник документов, Москва, 2019.

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計3件（うち査読付論文 0件 / うち国際共著 1件 / うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 青木雅浩	4. 巻 8
2. 論文標題 1920年代前半の外モンゴルの国内情勢に関する情報と政治情勢	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 モンゴルと東北アジア研究	6. 最初と最後の頁 pp.25-38
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 青木雅浩	4. 巻 別冊第6号
2. 論文標題 ボドー事件とロシアの反ボリシェヴィキ派	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 北東アジア研究	6. 最初と最後の頁 185-204
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 .	4. 巻 25
2. 論文標題 .	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 .)	6. 最初と最後の頁 310-329
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

〔学会発表〕 計6件（うち招待講演 1件 / うち国際学会 3件）

1. 発表者名
2. 発表標題 1920-iod ony ekhen Ueijn Mongolyn uls tOriijn bajdal ba Mongolyn zUUn oron
3. 学会等名 THE 12th INTERNATIONAL CONGRESS OF MONGOLISTS (国際学会)
4. 発表年 2023年

1. 発表者名
2. 発表標題 Information on the Political Turmoil in Mongolia and Mongolian “Counterrevolution” in the First Half of 1920s. (モンゴル語による発表)
3. 学会等名 The 15th International Symposium in Ulaanbaatar "Mongolia and Japan: From the Dynamism of Eurasia" (国際学会)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 青木雅浩
2. 発表標題 書評『北東アジアにおける近代的空間』 20世紀のモンゴルとの関連から
3. 学会等名 『論集 北東アジアにおける近代的空間：その形成と影響』書評会（招待講演）
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 青木雅浩
2. 発表標題 ロシア反ボリシェヴィキ派とモンゴル
3. 学会等名 第65回ロシア史研究会年次大会（2021年度大会）【パネルA】「シベリア出兵：その内外への波及」
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 青木雅浩
2. 発表標題 1920年代前半のモンゴルの政治情勢とロシア内戦 外モンゴル関係史料に見る反ボリシェヴィキ派の活動
3. 学会等名 シベリア出兵史研究会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 青木雅浩
2. 発表標題 モンゴル人民共和国建国期の政治事件と国際情勢
3. 学会等名 シンポジウム「北東アジアにおける「近代」空間の形成：帝国と思想」（国際学会）
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計3件

1. 著者名 小松久男編者代表	4. 発行年 2023年
2. 出版社 丸善出版株式会社	5. 総ページ数 814
3. 書名 中央ユーラシア文化事典	

1. 著者名 姜尚中監修、青山亨他編集、成田龍一他著	4. 発行年 2023年
2. 出版社 株式会社集英社	5. 総ページ数 840
3. 書名 民族解放の夢（アジア人物史第10巻）	

1. 著者名 加藤直人、中見立夫、広川佐保編	4. 発行年 2022年
2. 出版社 加藤直人研究代表「科研基盤（B）（一般）」研究会	5. 総ページ数 167
3. 書名 『「帝国」の秩序と再編：モンゴルの文書と史跡の探求』	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------